

ダレは who より遅い？

—日本語を獲得する子どもとその母親の人物質問の使用について—

宮田 Susanne

Does *dare* Appear Later Than *who* ? About The Use of Personal Questions Observed With a Japanese Speaking Child and his Mother

Susanne Miyata

問 題

欧米の質問獲得の研究では、who (wer, qui 等) の疑問詞は早期に獲得され、what や where (とその相対物) とほぼ同じ時期に出現することら、一般に述べられている。

ドイツ語の場合で、Wode 1975: 65 は、wer が was より早期に出現し、どちらが早く生産性を得るのがはっきりしないと述べた。ただし、4・3格の wen・wem はより遅く出現する。

英語に関しては DeVilliers/DeVilliers 1985: 87 は “The earlier appearing forms were what, where, and who” と述べた。

また、Berman 1985: 278 によると、ヘブライ語の場合でも、ma (なに) と YN 質問が先に、続いて mi (だれ) と éfo (どこ) が獲得される。

それに対して、著者の3人の日本語を獲得する子ども(以下R児、N児、A児)、の縦断観察データの結果として、日本語の質問獲得のなかでは、ダレの出現が比較的が遅い、そして子どもにしても、母親にしても、ダレの使用頻度が低いということがわかった。(図1・2参照、宮田1991: 50参照)

同じく、韓国で行った Clancy 1989 の観察的研究にも、類似した結果が得られた。“Nwukwu ‘who’ was produced very late in the developmental sequence by the two Korean Children” (: 338)。一年間の質問数を計算してみると、母親の全質問数(一年間の観察時間内に二人の母親が発言したもの) $t_{11} 1369$ のなかでは “nwukwu (who/whose)” が 97 resp. 11回 (7.09% resp.

210 ダレは who より遅い？

0.8%) しか使われなかったことがわかる。2人の子ども (1 ; 8-2 ; 8, 1 ; 10-2 ; 10) の全質問数は t11 785で、nwukwu は 38 resp. 7回 (4.84% resp. 0.8%) 現れた。(: 332)

ダレと nwukwu の比較的遅い出現と低い使用頻度の原因は、子どもの認知発達のなかではなく、言語的、そして文化的な背景で探らなければならないと思われる。そして、ダレをほかの質問詞と比べると、文法的に特別困難でないと判断される。むしろ、一般的な言語背景・文化背景に原因を捜すべきだと思われる。

ダレの使用範囲は英語の who やドイツ語の wer などより狭いようである。人形やぬいぐるみに対してはナニやドレを使う場合もある。又、人を比べるときはダレよりドッチ・ドチラが使用される (who is faster? 対：ドッチ ガ ハイ?)。

ダレは直接的な言い方で、使用が避けられる。堅苦しい場面では、ドナタやドチラサマのような、より丁寧な言い方をとるほかに、名前を使ってきくことも多い (例えば：Nサマアスカ?)。そのことがカレ・カノジョ・アナタ等の人称代名詞の低い使用頻度や回避 (cf. Hinds 1975: 133ff, Martin 1975: 106f, 1075, Yanabe 1991: 139) に関連することが可能性がある。人称代名詞の低い使用頻度の結果として、ダレの意味、使い方が子どもにとってつかみにくくなり、ダレ・カレの対立的関係がドコ・ココほど簡単に把握できない。

または、日本語の場合では、人の名前とアイデンティティーをきくほかに、所属をきく質問も多く使われる (例えば：ドコノコ、ドチラノカタ)。このような社会的な原因によって、欧語との差が現れる。

以上の理由で、ダレの使用が一般的に少ない。子どもにとって、習得しにくいことばである。しかし、ダレという単語自体を使わなくても、その概念をほかの表現で表現することは有り得る。

従ってここで、ダレを含む質問だけではなく、より広く人物質問 (personal questions) の獲得とその使い方を調べることにした。

方 法

一人の子ども (R児) の1歳2ヶ月から3歳6ヶ月までの縦断観察から得たデータをもとにし、母親と子どもの人物質問の使い方を次のカテゴリーで分析することにした。

形：ダレ

ナニ

ドッチ, ドチラ

ドコ, ドコノヒト, ドコノコ

その他 (ドレ, ドナタ) の疑問詞と派生したもの

YN 質問

内容: ID (identity) 名前をきくもの,

AG (agent) 動作の行為者をきくもの,

PROP (proprietor) 物の持ち主をきくもの

場面: RPS (real present) 現実的, 現在 (目の前にいるとき, 電話や玄関先のように相手を見られないとき等)

RPF (real perfect) 現実的, 過去 (先日に興ったことのリコンストラクション)

FIC (fictional) 非現実的 (本の絵や話, テレビ番組のキャラクター)

PIC (picture) 絵 (写真, 絵本の絵, 子どもの描いた絵等)

対象: C (child) 子ども自身

FAM (family) 家族や同居人,

CHAR (character) 人形, ぬいぐるみ, キャラクター

FRD (friend) 友だち, 知合い, ほかの親戚

STR (stranger) 未知な人

ANIM (animal) 動物 (キャラクター以外)

以上のカテゴリーで, 人物質問を含む場面を分析し, 二週間にまとめ, 全質問に対する割合, そして10分間にあたる平均使用数を計算した。

結 果

結果は, 1. 量・頻度, 2. 形, 3. 内容, 4. 対象, 5. リアリティの程度, に分け, 説明する。

1. 量・頻度

予想した通り, ダレを含む質問の使用がR児にも, 母親にも, 少ない。

ダレ	R児	母親
全質問に対する割合	0.76%	2.65%
10分内の使用数	0.14	0.28

それに対して, 広い意味での人物質問の割合が比較的高い。

212 ダレは who より遅い？

人物質問	R 児	母親
全質問に対する割合	6.72%	6.55%
10分内の使用数	1.17	0.68

人物質問のなかで YN 質問が一番多く使われている。

人物質問	R 児	母親
全	692 (100.00%)	216 (100.00%)
YN	471 (68.06%)	80 (37.04%)
ダレ	78 (11.27%)	88 (40.74%)
その他	143 (20.66%)	48 (22.22%)

2. 形

形から見ると、人物質問は次の順で獲得される。

YNQ > ワQ > ナニ > ダレ

人物質問は質問獲得の早期 (2 ; 1) に出現し、2 ; 2 は YNQ としてよく使われるようになった。(ママ ノ? [=ママのジュース?]; パパ ノ? [=パパなの?] 2 ; 2 : 11)

それに対して、最初のダレを含む質問は7ヶ月以上後にしか現れない。

人物質問	最初出現	生産性
YNQ	2 ; 1 : 28	2 ; 2 : 11
ワQ	2 ; 1 : 11	2 ; 3 : 26
ナニ	2 ; 4 : 6	2 ; 4 : 6
ダレ	2 ; 9 : 8	3 ; 3 : 4

ほかの疑問詞 (ドコ, ドッチ等) は予想したより少ない。ドナタは R 児にも母親にも使用されない。ナニは比較的少なく、そして一時的にダレと混同が見られる。(図 3 ~ 6 参照)

3. 内 容

すでに 2 ; 2 から Prop (持ち主), Id (アイデンティティ), そして Ag (行為者) の三つの

カテゴリーのものが使われる。各時期に一つのカテゴリーへの傾斜 (preference) が見られる (図 7・8 参照)。初期 (2; 2-2; 4) では主に所有に関する質問が使われる (ママ ノ? 2; 2:11; コレ パパ ノ? 2; 2:25; アト パパ ノ? 2; 3:26等)。2; 11-1; 12の時期では人やキャラクターの Id を求めるものが大半を占める (ミヤタ ノ パパ? 2; 11:13; コレ ナニ? コレ ミンニー? 2; 12:1; ダレデ アソンデン ノ? 2; 12:23)。それに対して, 3; 6では行為者をきく Ag のタイプが増加する (ママ デキル? 3; 6:17; コレ ダレ イレタ? 3; 6:24; ダレ ガ クツケタ? ダレ [ナ] ノ? ライプロボヤサン? 3; 6:24)。

この現象は, ナニ質問の発達順に対応する。ナニの場合は名前をきくもの (コレ ワ? 2; 2, コレ ナニ? 2; 4) で始まり, 行動 (ナニ ヤッテル? 2; 7), そして更に意味 (X ッテ ナン ノ コト? 3; 4) に移る過程が見られた。(Miyata i. p.: 117)

子どもの興味の焦点が名前 (コレ ナニ?) やアイデンティティ (パパ [な] ノ? 2; 2:11, ダレ デチュ カ? 2; 9:8) のことから行動 (ナニ ヤッテル?) やその行為者 (パパ ンガ ヤル? 2; 3:26, ダレ ガ コレ カッテ モラッタ [=くれた] ノ? 2; 10:13) に移ることが原因として考えられる。

早期の所有関係 (Prop) については R 児の場合には特に強い関心が見られた。R 児は周りの物すべてを「父親の物」と「そうでない物」に分けたようである。ほかに観察した子どもにはこうした傾向が見られなかった。(Miyata i. p.: 129ff)。

母親が早期 (1; 9, 1; 10, そして特に 1; 11) に主にアイデンティティをきく質問 (Id) を使用する (図 9 参照)。コレ ナニ? 等の質問と同様に, その質問が子どもの知識をチェックするものである (コレ ダレ? パパ ナ ノ? 1; 9:9; イッキューサン? 1; 11:1 等; Miyata i. p. 156ff. 参照)。2歳になってからは, 行為者を聞くもの (ダレ トッタ ノ? DR クン ガ トッタ ノ? 1; 12:18) が増え, アイデンティティに対する質問とほぼ同じ比率で使われる。所有に関する質問はほとんど現れない。

4. 対 象

人物質問の対象を見ると, 初期の数ヶ月では家族員 (Fam: 主に父親, そして姉の Y, 母親) のことをきくことが多い。2; 3以降は自分のことを対象にする質問(C), そして絵本やテレビ番組のキャラクターについてきく質問 (Char) が現れる。前者はほとんど全てが所有関係をきくものである (コレ アクン ノ? 2; 3:23), 後者にアイデンティティをきくタイ

214 ダレは who より遅い？

ブが多い (ピッコロ ア？ ; トダイモ？ [=ドラエモン] 2 ; 3 : 23)。

しかし、未知な人に関する質問 (Str) は非常に遅く出現し、3 ; 6 以前は使われていない。それは、子どもが一般的に、ある程度知っている事柄についてしか聞かないという観察結果 (Miyata i. p.: 170ff. 参照) に一致する。

母親の質問使用にも、家族員を対象にしたものが多いが、C と Char もよく現れる。2 ; 11 - 2 ; 12 ではキャラクターの名前をきくものが消え、友人に対するものが増える。名前や単語をチェックする時期 (上記参照) が過ぎたことを示す。その代わりに、子どもの自己意識の高まりを反映して、子ども自身を対象にした質問(C)が増加する。そのなかにはふざけ、言葉遊び、ゲームの質問が多い (コノ ヒト ダレ？ 2 ; 11 : 7 ; D ンチ ノ リョークン ッテ ダレ？ 3 ; 6 : 3)。

母親も、R 児と同様に、未知な人についてはきかない。ダレ質問の典型的な機能は、知らない人のアイデンティティ (「この人は誰？」等) をきくことだと一般的に思われることに対して、この現象は興味深い事実である。

5. リアリティの程度

R 児の初期の人物質問は、「今」と「ここ」(RPS) に関連してる。一方で、母親には Pic タイプ、すなわち写真や絵に写っている者のアイデンティティをきく質問が多かった。R 児は Pic を 2 ; 3 まで使わなかった。

しかし、上で述べたように、最初の質問はアイデンティティを求めるものではなく、所有を聞くものである。これは人物質問のなかの特別な位置を占めるとともに、R 児の質問使用の特徴的な点である。

過去のことに対する質問 (RPF) はすでに 2 ; 2 に出現するが、2 ; 7 - 2 ; 8 に徐々に増え始め、3 歳の誕生日の前後にはさらに増えた。子どもの記憶スパンが延長した結果として、前よりいろいろなことを思い出すことができる。

もう一つの理由は、興味の焦点がアイデンティティから行動や行為者に写った。子どもは、知らない間に身の周りに起きた事象について、それがだれによってどのようにもたらされたかを理解しようとするようになる (パパ？ [=パパに買ってもらった？] 2 ; 11 : 21)。

早期の(1;9-1;11) R児がまだ質問を使わない、母親が特にR児がまだ質問を使わない早期(1;9-11)にPICカテゴリーにあるような絵本のキャラクターや写真に写っている人物の名前をききだすことが多い。1;12以降はチェック質問の割合が減る結果として、現在・過去の実際の出來事に関する質問(RPSやRPF)が圧倒的に多い。

ま と め

上の分析は一人の子どもとその母親の人物質問の使用を見てきたが、データベースが小さいため、一般的な結論は出すことはできない。

特に、アイデンティティ(Id)から行為者(Ag)への移転はほかの子どもにも現れるかどうかを確かめることが今後の課題である。初期の所有に関する質問(Prop)の使用頻度の高さはR児の特性だと考えられる。形について、YNQが人物質問の大半を占めることも一般的な現象であるかどうかを確かめなければならない。

比較の対象になる、英語やドイツ語などのデータがないので、確認はできないが、日本語の人物質問の全体的な割合は低いように思われる。

今回の分析結果として、日本語でも人物質問が早い時期に出現することがわかった。その人物質問は、必ずしもダレを含むわけではなく、YNQ等の異なった形もこの機能で使われることが明らかになった。人物質問の代表的な疑問詞のダレが比較的遅く出現するにも関わらず、人物質問自体は早期に現れることは間違いない。

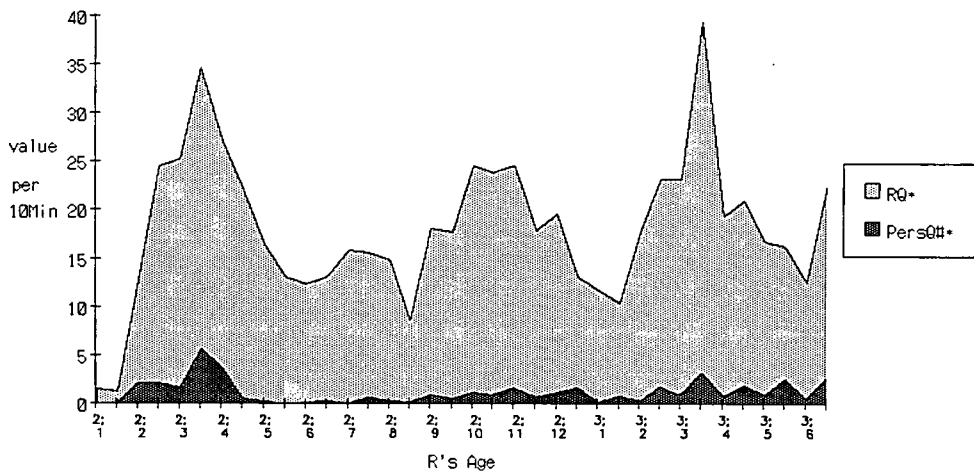


図1 R児の一般質問と人物質問の使用頻度 (10分当り)

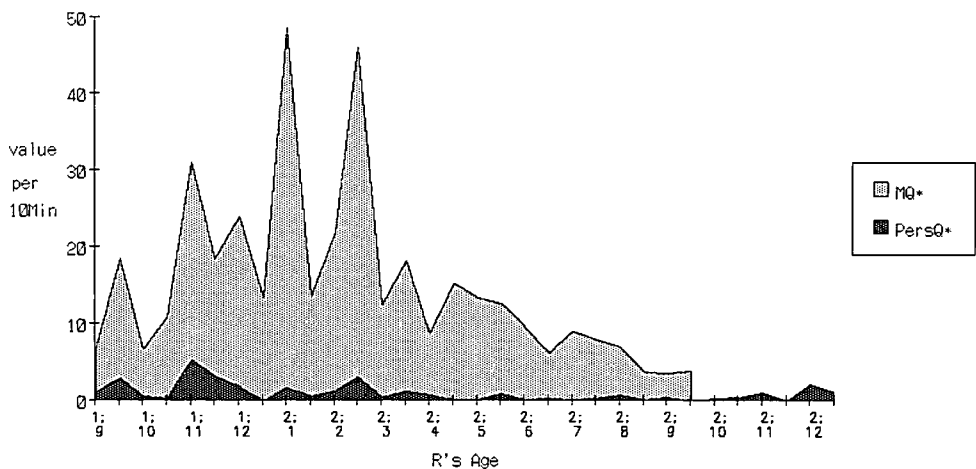


図2 母親の一般質問と人物質問の使用頻度 (10分当り)

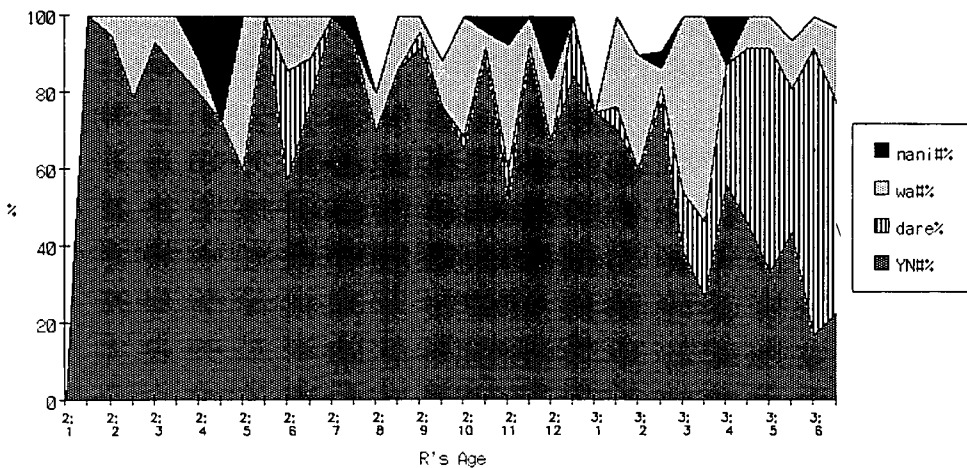


図3 R児の人物質問の形の割合

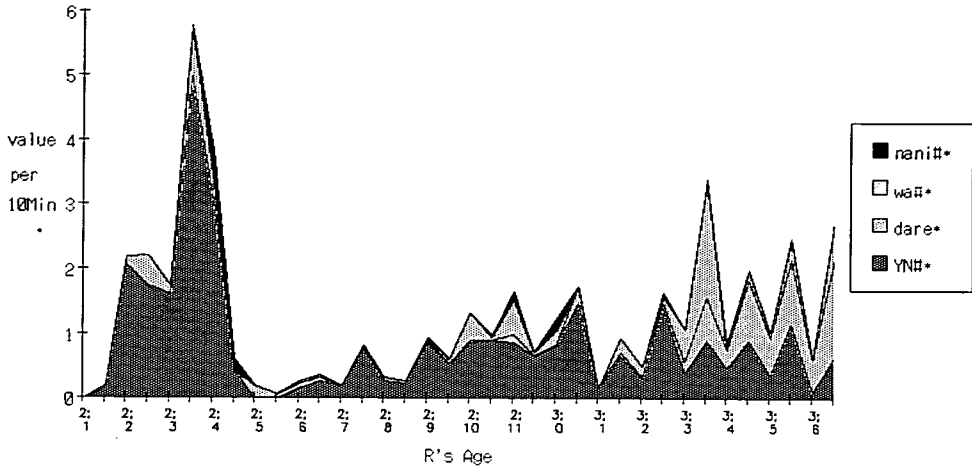


図4 R児の人物問の形 (10分当り)

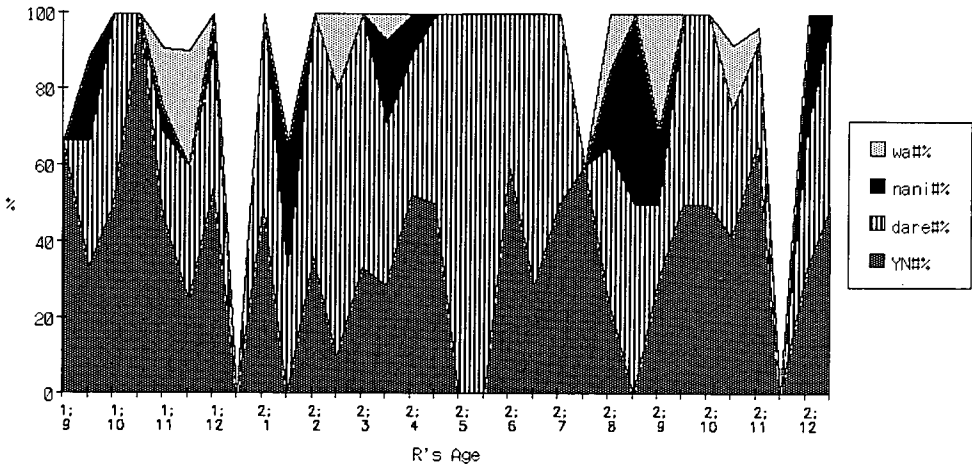


図5 母親の人物質問の形の割合

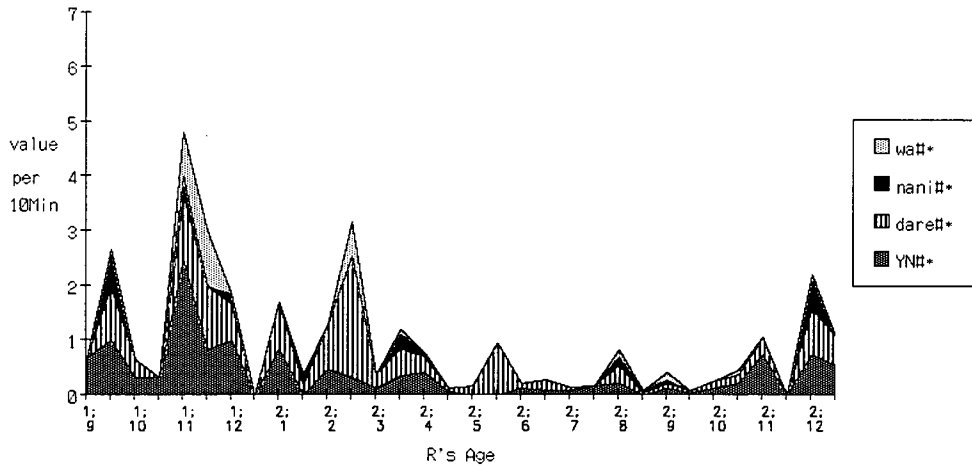


図6 母親の人物質問の形 (10分当り)

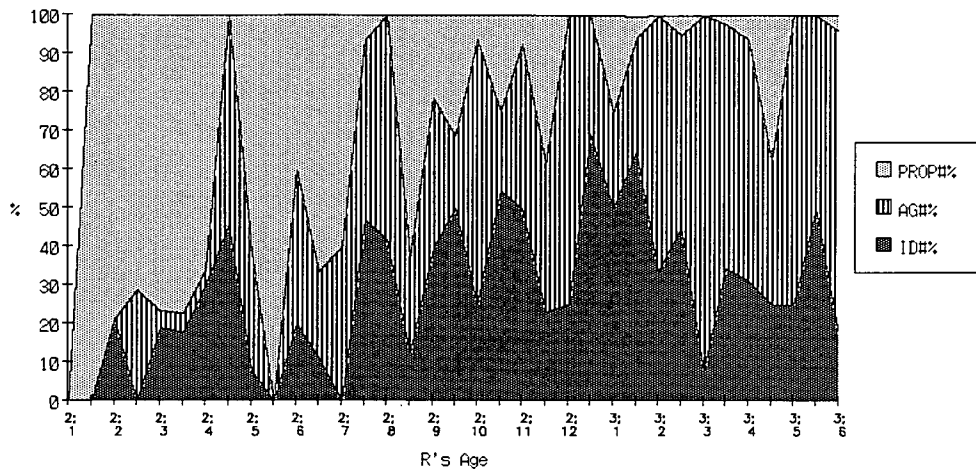


図7 R児の人物質問の内容の割合

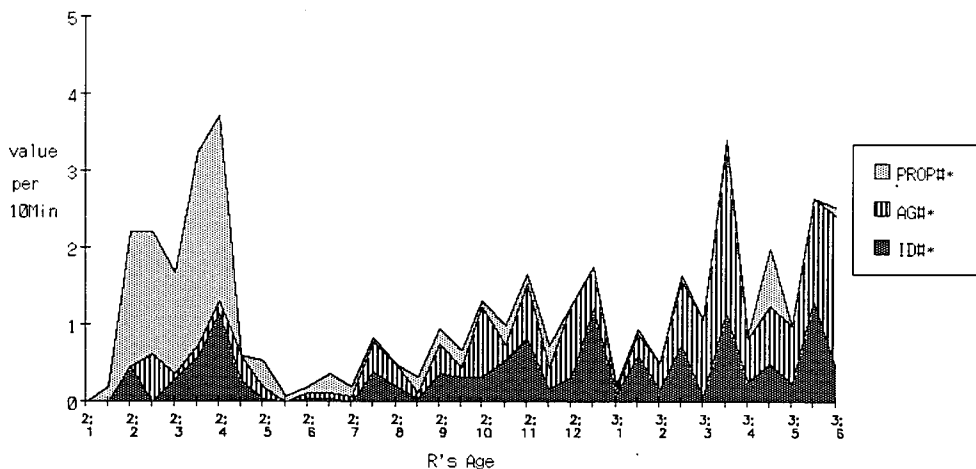


図8 R児の人物質問の内容 (10分当り)

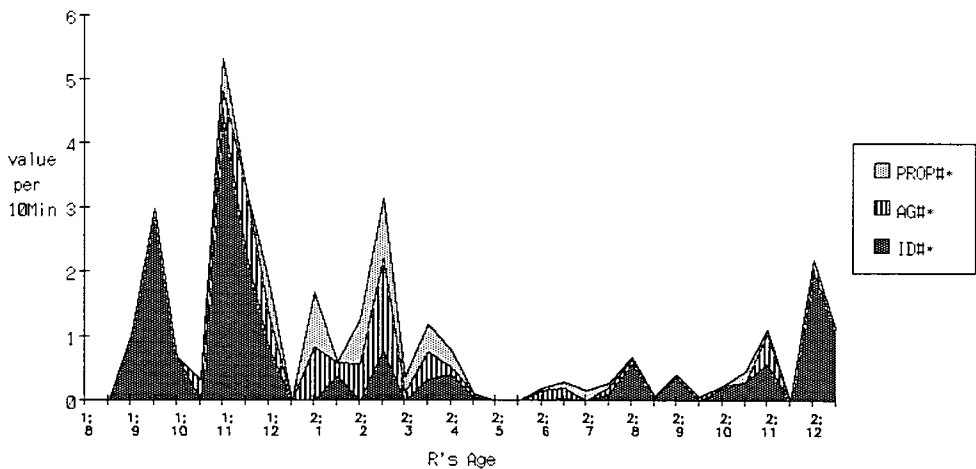


図9 母親の人物質問の内容の割合

文 献

- Berman, Ruth 1985
 * "The Acquisition of Hebrew." In: Slobin (ed.) 1985: 255–372.
- Clancy, Patricia M. 1989
 "Form and Function in the Acquisition of Korean Wh–Questions." Journal of Child Language 16, 323–347.
- DeVilliers, Jill G. / DeVilliers, Peter A. 1985
 "The Acquisition of English." In: Slobin (ed.) 1985: 27–140.
- Hinds, John 1975
 "Third Person Pronouns in Japanese". In: Peng, Fred C. C. (ed.), Language in Japanese Society. Current Issues in Sociolinguistics. Tokyo: University of Tokyo Press
- Martin, Samuel E. 1975
A Reference Grammar of Japanese. New Haven/London: Yale UP
- 宮田, Susanne Willenborg 1991
 "疑問表現の発達Ⅳ—人物質問", 日本教育心理学会, 第33回, 発表論文集 p. 49f. Miyata, Susanne i. p.
Japanische Kinderfragen. Zum Erwerb von Form–Inhalt–Funktion von Fragensausdrücken. [Diss. U. Hamburg 1991]
- Slobin, Dan Isaac 1985 (ed.)
The Crosslinguistic Study of Language Acquisition. Volume 1: The Data. Hillsdale N. J.: Lawrence Erlbaum Ass.
- Wode, Henning 1975
 "Some Stages in the Acquisition of the Questions by Monolingual Children." In: Raffler–Engel, Walburga von (ed.), Child Language. Special Issue of WORD 27, 261–310.
- Yanabe Akira 1991
Modernisierung der Sprache [翻訳語の成立事情]. München: iudicium